

## 『琉球語辞典』編纂上の問題点

著者	中本 正智
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	15
ページ	1-2
発行年	1991-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11961">http://hdl.handle.net/10114/11961</a>

# 『琉球語辞典』編纂上の問題点

中 本 正 智

琉球語辞典がなかなか日の目をみないのは、琉球列島の言語のありかたに起因しているように思われる。

その問題点のいくつかについて考えてみたいと思う。

- (1) 琉球列島のことばが多様であるということが、その一つの理由であろう。

沖縄島を中心に、北は奄美から南は与那国島まで無数の方言に分かれている。たとえば沖縄を中心に辞典をつうっても、方言が体系的に異なっているから、他の島まで含めるわけにはいかない。これらを含めるためには、均整のとれた資料を集めなければならない。したがって、一島ごとに精密な辞典をつうる必要が出てくる。これがないと一歩も前へ進めないであろう。島ごとの精密な辞典をつくるということ自体、大事業といわざるをえない。これまで、いくつかの辞典がつくられているが、とても琉球列島全体をカバーすることができない。宮古や八重山の辞典の記述を進めている意味は、このところにある。

- (2) 琉球語辞典として先行のものが無いということも大きな理由である。日本語の辞典は、辞典作成の永い歴史があり、意義の記述についても、あるていどの伝統がある。したがって、一語一語の記述は、先行の記述を土台にして記述を補っていけばよいのである。

しかし、琉球列島の各方言には、そのような先行の辞典がないから、すべて新しい構想によって意義の記述を行なわなければならない。

意義を記述するのが辞典であるから、言語学的な深い立法をもっていないと敗に終わってしまう。编者というのは、意味論など深い言語学の素養を身につけるように心がけなければならないのである。もしも、語の形式的小および意味的な析と記述に慣れていない编者によって編まれたとすると、意義の記述に不統一なものが出てきて、あまり意味のない辞典となってしまうであろう。native による語の分析が、いかに意味のあることであるか、ということが理解される。

- (3) 過去の文献のテキストが少ないということも理由となる。ことばは、どのようなものでも、過去の文献の中で使用され、あるいは、現実の言語生活の中で使用されている。これは、具体的な文脈の中で意味と用法が明瞭に反映されていることである。そこで、

その一語一語について具体的な文脈とともに辞典の中に示されなければならない。具体的な文脈の例示は、まず意味的な広がり発展に従って、基本的なものから抽象的および比喩的なものへと並べ、それぞれの下位区分の中で、歴史的な流れを基軸に順を追って並べていかなければならない。

ここで、すでに幾回かにわたって、名嘉真三成助教授が宮古の方言について、また、加治真市教授が八重山の方言について研究を深め、連載して語彙の積み重ねをしているのだが、その意図は、ここで明瞭となったと思う。

さらに多くの地域のことばについて連載していく予定である。大事業にはそれぞれのプランと見通しをもち、大事業なりの多くの研究者の協力がなければならない。

島じまの研究者の方がたのご協力を期待するものである。